

## ユニバーサル社会へ

表題は朝日新聞9月17日「耕論」。リードから一障害や年齢などにかかわらず、だれもが暮らしやすいユニバーサル社会へ。2020年には、日本でパラリンピックが開かれる。祭典だけに終わらせない、まちづくりの課題とは。

3人が語っているが、ここでは日本パラリンピアンズ協会副会長の大日方邦子さんの発言、「おせっかい」で住みよく、を紹介したい。



日本のまちのユニバーサルデザインは、海外に比べて決して悪くはありません。でも、ちょっと惜しいですね。さまざまな人が使うことを前提にしていないのです。

階段があくまで主役で、スロープを探すとわかりにくい場所にあったり、遠回りだったり。違う動線にあるところも多い。この春開業した新宿駅のバスターミナル「バスタ新宿」でさえ、そうです。階段を使える人も、使わない人も、使えない人もいることが前提になっていない。これでは「ユニバーサルデザイン」とは言えないと思います。

車いすの私がカナダでバスに乗ると、運転手がボタン一つ押すだけでスロープが出てきます。日本では、運転手がわざわざ降りて手で出します。他の乗客の注目を浴びて、なんだか申し訳ない気持ちになってしまうんです。

施設の整備において費用対効果を優先すれば、人数の最も多い層がターゲットになり、他の人たちは外れていきます。もっと発想を転換しましょう。スロープでもエレベーターでも手すりでも、いまは使えずに耐えるしかない人がいるかもしれない。20年後はもっとそれらを必要とする人がいるかもしれない、と。高齢化社会はこれからますます進みます。未来の暮らしを豊かにするための、前向きで先行的な投資のはずです。

スポーツをめぐる環境も同じです。8月に発表した日本パラリンピアンズ協会の調査結果では、パラリンピック出場選手の2割に障害を理由に練習の施設利用を断られるなどの経験がありました。車いすが体育館などの床を傷つけることも、大きな理由の一つです。これには二つの論点があると思います。一つは、床材の技術開発で解決できるのではということ。もう一つは「なぜ、傷んじゃいけないの？」ということなのです。

施設は本来、きれいに保つこと以上に使ってもらってなんぼのはず。「市民のための体育館なのに、障害がある人の利用がこんなに少ないのはなぜだろう」と、一人ひとりが違和感に気づいてほしい。

1998年長野五輪・パラリンピックの後、まちを歩く障害者は感覚的に増えたと思い

ます。報道で障害者が取り上げられる機会が増え、障害がある人もまちに出ていいというムードが広がったからでしょう。でも、最近はちょっと減ったかな。スマートフォンを見ながら歩く人が増え、「手伝えることはあるかな」と他者に関心を持つことが減っているように感じます。

効率を重視し、互いの領域に踏み込まないことが洗練された社会だと思われるのかもしれませんが、個人主義の行きすぎた非寛容な社会は住みにくい。最近、「おもてなしもいいけれど、もっと『おせっかい』を」と呼びかけています。

(2016年9月21日)